開催報告

農村振興シンポジウム

令和7年
日時：2月15日(土)
会場：なら100年会館 大ホール

主催者挨拶/農村地域活動の優良組織表彰式

主催者である奈良県山下真知事の挨拶の後、農村地域活動の優良組織表彰が行われました。

この表彰は多面的機能支払交付金制度や中山間地域等直接支払制度の取り組みにおいて、関係者の意欲の高揚を図るとともに、他組織の取組の更なる充実を促進するために創設いたしました。

先進的で他の模範となるとともに継続性が期待される取組で、農業体験等のイベントを通して都市農村交流活動など「活力ある地域づくりに向けた取組」、広域化や多様な主体の参画により「組織の強化に向けた取組」、耕作放棄地の解消と農地の有効活用や植栽･美化活動など「農村環境の向上に向けた取組」を積極的におこなっている組織に対して表彰するものです。

針ヶ別所の穂田留を守る会（奈良市）

耕作放棄地の解消を図る集積と農地の保全、地域住民全員で活動する組織として一般社団法人針ヶ別所未来開発を設立し、後継者が不在の農地管理や女性が主役の加工品開発等により、地域住民の共助意識の向上と地域発展を図っています。

十市町地域保全向上活動組織（橿原市）

農村の地域文化、伝統の次世代へ継承するだんじり祭を通じて新住民と町内企業の参加から、地域の活性化を図り、農業体験を通じた食育の実践など活力ある地域づくりに向けて積極的に取り組んでいます。

KSK（葛城市）

七集落による協議会活動「カツラギセブン」として、毎月の会合で、集落の共通課題の解決に向けた取り組みを検討。農地の景観保全にひまわり畑、各集落を巡る葛城山麓ウォーク、遊休農地を活用した古代小麦の生産･加工品開発、バイオ炭を農地に戻し資源循環を図る取組を進めています。

活動紹介パネル展

主催：奈良県　後援：奈良県多面的機能支払推進協議会
奈良県農村地域づくり協議会

基調講演

地域の魅力を都市に伝える
～農村の価値と持続可能な未来～

講師小林涼子氏
俳優、株式会社AGRIKO代表取締役

私は2014年から約11年ほど、俳優業のリフレッシュに新潟県で稲作のお手伝いをしていました。お手伝いを始めたきっかけは、4歳から俳優業をして20代になり、疲れてしまった瞬間があったことです。家族に勧められて、新潟県の棚田に行き、農業の楽しさ、新米のおいしさに魅せられてしまいました。

現在は東京で、株式会社AGRIKO（アグリコ）という農業と福祉の連携、農福連携の会社をつくり、3つの事業を行っています。まず、AGRICO FARM（アグリコファーム）という都市型農業の運営。そして、そこで働いてくださっている障害をもつ方々の才能を活かすことを中心にしたアート事業。最後に、ファームとアートを活用した教育事業です。AGRIKO FARMは都内に2カ所、都市のビルの屋上にあります。最初は農地を探していましたが、新潟のような広い土地や豊かな水は東京にはありません。では、東京にあるもの、東京の魅力って何だろうと考えたとき、私の答えは「人と消費地」でした。ここにはたくさんの人が住んでいて、たくさんのレストランがあります。そんな東京でどんな農業ができるかを考えているときに、「アクアポニックス」という仕組みと出会いました。アクアポニックスは、アクアカルチャー（水産養殖）とハイドロポニックス（水耕栽培）の二つを合わせた、魚の養殖排水を活用した水耕栽培です。魚の排泄物などが混じった水をバクテリアが分解をし、植物が吸収して水がきれいになり、魚のもとに戻る仕組みです。育てている魚はティラピアとホンモロコの2種類。栽培しているのは、クレソン、フィンガーライム、エディブルフラワー（食べられる花）、水菜、からし水菜、ホップ、マリーゴールドなど、食用花とハーブを主に生産しています。四季折々に合わせて少量多品目で、常時8種類ほどを生産しています。それを、約20名の障害を持つ方々が管理してくださっています。苗植えから収穫、お掃除まですべての業務を分担して細分化することで、いろんな特性の方にも作業しやすい仕事場のつくり方を勉強して実践しています。

今日のテーマは「地域の魅力を都市に伝える」ですが、東京生まれ東京育ちの者として、都市から見た奈良という視点でお話をさせていただきます。まず奈良の魅力を再定義できればと思います。私が見る奈良の魅力の一つ目は、おいしい食。奈良漬け、柿の葉寿司、野菜、イチゴなどのたくさんの農産物があります。二つ目は、歴史と伝統。奈良県にある指定文化財の総数は1508件、全国で4番目に多いそうです。国宝も全国で3番目に多く、たくさんの古き良き日本の風情、古都としての魅力があります。三つ目は豊かな自然。私は昨年、吉野山の桜を見にきました。素晴らしかったです。このように、奈良には、食と文化と観光があり、足を運びたくなる魅力があります。

ではなぜ、その素晴らしい魅力を都市へ伝えることができていないのでしょうか。これは少し農業とは違いますが、ドラマづくりにおいてもどれほどいい脚本、いい企画でも皆さんに知って見ていただかないと伝わりません。伝えるのは本当に大変なことだと実感しています。今、皆さんはその状態にあるのではないかと思います。おいしい野菜を「おいしいですよ」と言ってもなかなか伝わりません。ではどうすればいいか。先ほど分析した奈良の魅力、奈良の文化や観光と一緒に食の素晴らしさを伝えることで、奈良の魅力と掛け算されて、唯一無二のものになっていくのではないかと思います。私たちの例で言うと、「ファーム･トゥ･テーブル」の取り組みがあります。農園から食卓へ。ビルの屋上で採れた野菜や魚を、そのまま階段を降りて、飲食店の方々に召し上がっていただいています。地産地消を超えて、「ビル産ビル消」です。農業といっても、生産量では新潟には敵わない。都市でできることをしようと考えてつくり出した、都市の魅力を活かしたモデルです。また、私たちは教育にも力を入れています。百年後の未来を見据え、おいしい食と家族の幸せをどうやったら実現できるかを考えて、食育イベントを年に数回行い、子どもたちに収穫や食べる体験をしてもらっています。このファームの運営には地域の子育て世代の女性たちにも参加していただいています。さらに、もっと広範囲の人たちに伝えるには、六次産業化も有効な手段だと思います。私たちの農園では、加工商品を作り、農園で働く障害者の方々がデザインしたラベルを貼って販売しています。このラベルには農産物をお世話してきた思いが込められています。このように、小さな農園でもいろいろな使い方をして、いろいろな人と手を組むことで、おいしい食を伝えることができると感じています。皆さんにも改めて奈良だからできること、自分たちのできることを主軸において、いろいろな人と一緒に、農業と掛け算して何ができるかという視点で考えていただけるといいかなと思います。

パネルディスカッション

都市と農村の共存共栄 ～持続可能な地域社会を目指して～

都市と農村の共存共栄を図るための3つのキーワード。

コーディネーター 中村 貴子氏
京都府立大学農学食科学部農学生命科学科 准教授

私は生まれも育ちも大阪市という都市部ですが、もともと食に関心があり、大学で有機農業と出会ったことから、農学に携わる大学教員の道へ進みました。現在は大学で教える傍ら、社会活動にも携わっています。また、大学の研究室では、農村での活動も行っています。棚田のオーナー制を利用し、学生たちと年間5回ほど、田んぼに通っています。私のような都市部で生まれた人間にとって農村で感じるのは、農村は知恵の宝庫だということです。農業とは知的産業であり、農村の人と一緒の時間を過ごして感動したりすることが、都市と農村の共存共栄において重要だと考えています。

今日は、都市と農村の共存共栄をテーマに、パネラーの皆さんの活動を教えていただき、多くの学びを得ることができました。それらは大きくわけて3つのキーワードに集約できると思います。一つは、都市と農村の交流です。都市との農村の隔たりをつくることなく、農村から都市へ出ていって交流し、また都市の人にも農村に来てもらって交流する。お互いが行き来する関係性をつくっていくことが、都市と農村の共存共栄において重要なキーワードであると思います。二つ目は、子どもさんです。食育基本法が2005年にできて以後、小学校では食農体験の学習に力を注ぐようになりました。その場所を農家さんが提供し、子どもたちの学びを支援してくださっています。この取り組みを次のステップへ続けていくには、地域のコミュニティビジネスとして育てていくことを真剣に考えることが重要で、そのためには行政の協力も得ていく必要があると思います。三つ目は、次の時代に農業という知財をつなげることです。先ほど申し上げたように、農業は知恵の宝庫です。農村は生きた学びを得る場所で、農業を学びたいという人は若い人でも増えていると思います。そういう人が農村の人と普通に会話するところから学びが始まります。農業がもっている知財を次の世代につなげる方法を、農村の人だけでなく都市の人も一緒になって考えていく。そういう時間と空間をつくっていくことが、明るい未来につながっていくのではないかと思います。

次の世代へ、農業の喜びを引き継いでいきたい。

窪 一氏
NPO法人ハンサムガーデン代表理事

私たちNPO法人ハンサムガーデンは農事修学の場と農業技術の研鑽研修を行う団体です。奈良県宇陀市と奈良市中町で耕作面積4ヘクタールの農場をもち、年間50トンのレタスを出荷しています。

私自身は2008年、京都市の大原百井という集落の体験農園で農業をスタートしました。そして、13年前に宇陀市に縁があり、移ってきました。有機農業で採算を取るにはどうすればいいだろうか、チームのみんなの雇用を守るために周年を通して栽培できる農業をしなくてはならないと考え、栽培技術をレタスに絞り、研究・生産してきました。同時に、自分たちの農業や栽培環境を誰に引き継いでいくか、ということも大きな課題だと考えました。ですから、私たちハンサムガーデンの第一の理念は、農事修学の場を創造することですが、ビジョンとして次の世代に農地と栽培環境と商環境を含めたエコシステムを引き渡していくことを目指しています。

私たちはNPO法人のほかに、株式会社ハンサムガーデンを運営し、都市部でレタスの販売を行っています。販売総数は年間約25万個。お客さんの比率は現在、飲食店・ホテルが7%、自然食品店を中心とした小売店が70%、残りがネット販売です。この3年間、お客さんの聞き取り調査に力を入れてきましたが、そこで気づいたのは、お客さんが買い続けてくれている理由がとても大切で、私たちの目指すゴールは「いつものレタス農家になること」だということです。買い続けてくれるお客さんがいることは、勇気づけられますし、お金には代え難いモチベーションになります。その一方で、宇陀市では全国に先駆け、「オーガニックビレッジ宣言」をしまして、新しい仲間が集まってきて、有機農家ミーティングを始めています。その目的は「農家の誰一人として、舞台から降ろさせないこと」。農村にみんなが活動できる場所をつくることを目指しています。

農村基本計画のリサーチによると、農家（農業経営体）は108万（2020年）から54万（2030年）に、半分に減るだろうと言われています。そこで私たちが発信していきたいのは、ハンサムガーデンのノウハウです。私たちの農業を見て、都市の人が一人でも二人でも興味をもってくれて、農業を考えてくれたり、農業の喜びを発見してくれるようになったら、そこに未来があるのではないかと信じています。

農業体験を通じ、農村の関係人口を増やしていく。

下川 麻紀氏
自然派農場しもかわ代表

私が農業を始めたきっかけは、愛媛から奈良に嫁いできて、義父母の畑の手伝いを始めたことでした。そのうち手伝いだけでは終われなくなり、それまで人に貸していた農地も返してもらい、自分が農業していくことにしました。ある日、子どもがトマトをかじりながら「ママの野菜は世界一おいしいね」と言ってくれて、その一言が本当にうれしくて、子どもには安心の野菜を食べさせてあげたいと無農薬で作っていこうと決めました。その思いだけでもう18年、無農薬、無化学肥料で農業を続けています。

最初は一般的な野菜を栽培していましたが、レンコンに行き着いて、今では1町（10反）ほどの農場で夫と二人でレンコンを育て、一般的な水掘りとは違う方法で収穫しています。一本のレンコンを掘るのは本当に大変で、その喜びをいろんな人、子どもたちに知ってほしいと考え、農業体験を始めました。みんなでレンコンを掘り、レンコン料理をつくって食べて、夏はそうめん流しもしています。奈良県内の方もたくさんいらっしゃいますが、今日のテーマである都市部の大阪、兵庫、滋賀、愛知県からもたくさん来ていただいています。大半は子ども連れの方ですが、大人だけの方もいて、みんなで一緒に収穫して、料理をして、食の大切さを感じていただいています。

また、私は観光事業のお手伝いとして、「山添村ガストロノミー・サスペンスツアー」の活動もしています。ガストロノミーはスペイン語で、「食」を体験するツアーという意味が込められています。参加する人は山添村の飲食店や農家で「食」を楽しみながら、謎を追っていくのですが、サスペンスの好きな方が東京や愛知県など遠方から来てくださいます。私の農園では、農業体験のほんの一部だけをしてもらっていますが、「また山添村に来てみたい、今度はレンコン掘りがしてみたい」と思ってもらえる活動ができたらと思っています。そんなふうに農村の自然や農業に興味をもっていただけて、山添村と継続的につながりをもつような関係人口が増えていけばいいなと考えています。こうした農業体験をきっかけに農業に興味をもっていただく、農業って楽しいかも、と思ってもらえるような環境をこれからもつくっていきたいと思います。

都市と農村をつなぐ「入り口」の役割を果たしていく。

小林 涼子氏
俳優、株式会社AGRIKO代表取締役

都市と農村の交流について考える上で、私は農村に行く側からお話しさせていただきたいと思います。私が20代そこそこで新潟に初めて行ったとき、「農村には何もない」と言ってしまいました。今思えば、本当に失礼なことを言ってしまったと反省します。ただ、私のようにいきなり農村に行った者が、都市とは違う農村の価値を知るのはとてもむずかしいことでもあります。そういうときに、農村の方が受け入れてくださり、農業経験がなくても苗箱を洗えることを教えてくれたりすることが、都市農村交流の魅力だと思います。新潟での体験を振り返り、私にとって何よりも人生の糧になったのは、農村の皆さんが私を温かく迎え入れ、農村の価値と都市の価値が違うことを教えてくださったことだと感謝しています。

農村では今、農家の数が減少しています。農業従事者の数だけで考えると、一人の農家さんが100人くらいの消費者を背負っている状況です。そこに自給率を加えて考えると、だいたい40人くらいになります。この数字をみただけでも農業に携わっている方々はすごいと思います。映画で言えばヒーローだと思います。人々の生活を肩に乗せて、毎日黙々と植物と向き合い、生産されたものを届けるというのはすごい責任ですし、みんな食べ物がないと困ってしまいます。では、農業の十年後をどうやってつくっていくのか。その一つは、都市農村交流の小さな積み重ねにあると思います。

私たちAGRICO FARMではお母さんが子連れでたくさんいらっしゃいます。夏休みになるとイベントをするので、来園者が100人以上になるときもあります。そのなかに、「アグリコの社長になりたい」と言ってくれた子がいるんです。「ぜひなってほしい、そのために私はやっているのだから」と思いました。また、「新潟に行ってお米をつくってみたい」という声もありました。そんなふうに、私たちAGRICO FARMは、都市と農村とつなぐ入り口、ゲートでありたいと考えています。このゲートから入って、おいしい、楽しい体験をしていただく。そういう身近なことを積み重ねていきたいと思います。